

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 24 日現在

機関番号：34505

研究種目：基盤研究（c）

研究期間：平成 22 ～平成 24 年

課題番号：22530686

研究課題名（和文）高齢者 QOL 向上のための集団形成要因に関する研究

研究課題名（英文） Study about the factor of group formation for senior peoples QOL improvement

研究代表者

藤田 綾子（FUJITA AYAKO）

甲子園大学 人文学部 教授

研究者番号：60030045

研究成果の概要（和文）：本研究は、高齢者大学での仲間づくり（集団形成）が、健康長寿を目指した高齢者の QOL 向上のために与える影響について明らかにすることを目的にした。

結果、高齢者大学で形成される集団は高齢者大学の教育目的（社会参加）を集団規範として形成され、新しい価値の取得と仲間との共有化によって、修了後の活動展開を活発化し、結果、生活満足度を高めることを実証的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）： In order to investigate the make friends within the class of senior college has an positive effect for senior peoples QOL improvement .

The norm of the friend group in the senior college is made by the purpose of senior college education and the group members has common value .

And the common value activate the senior people's social participative activity and positive effect for subjective life satisfaction

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
22 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
23 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
24 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：高齢者 集団活動 サクセスフル・エイジング、イノベーター QOL

1. 研究開始当初の背景

わが国の高齢者の割合は、2013 年に人口の 23% を占める超高齢社会をむかえた。これらの社会で高齢者の QOL (Quality of Life) の向上に努めることは、現在の高齢者にとって

だけでなく、これからの高齢者や社会全体にとっても重要な課題である。

高齢者個々人の QOL を高めめるための介入の一つが、高齢者を対象として民間、行政、NPO 団体などさまざまなおこなわれて

いる高齢者のための学習講座である。そして、それらの学習機関で学んだ高齢者は修了後、地域施設で高齢者相互支援、障がい者支援、子育て支援、異世代交流、環境問題、町おこしなどの活動を展開するという成果をあげている。しかし、高齢者が学習講座に参加することで、QOL を高めることが出来るのは高齢者の何が変化したのかという媒介変数についての検討がなされていない。

2. 研究の目的

研究代表者は、これまでの研究から、高齢者大学での仲間づくりが高齢者の QOL 向上に影響を与えることを明らかにしているが、高齢者大学という学びの場で形成される仲間づくりの規範を形成しているのは、高齢者大学の教育目標ではないかということ、その目標が、社会参加活動という目標であれば、社会参加への移行が高くなり、結果、主観的満足や健康増進・維持に影響を与え、QOL の向上へと結びついていることを検証することを目的とする。

3. 研究の方法

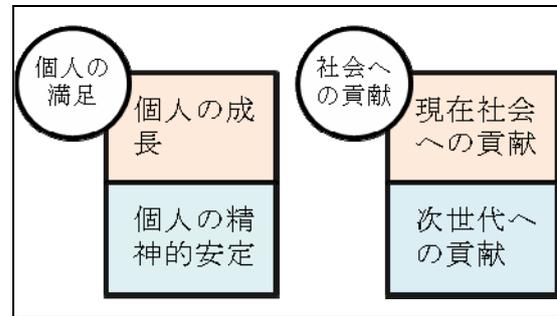
本研究の調査協力者として、NPO 法人大阪府高齢者大学校の受講者を対象に、入学間もなくと修了時に2度調査を行うことを3年間行なった。(受講者 平均 1000 名 1 年間の受講 約 40 講座開設)

調査協力校の教育目標は、修了後の「社会貢献活動」(プロダクティブエイジング)であることから、プロダクティブエイジング意識の測定尺度を開発し、講座学習という介入によって、仲間づくりやプロダクティブエイジング意識の変化について、さらに変化と参加意欲、主観的満足度の関係について分析を行った。

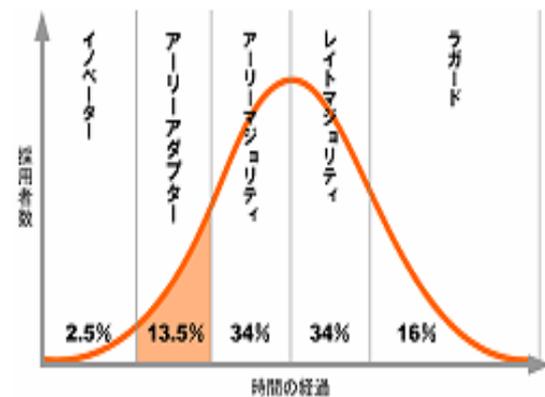
4. 研究成果

研究1：健康な高齢者のサクセスフル・エイジングのための生き方としてプロダクティブ・エイジングの可能性を探るために、「次

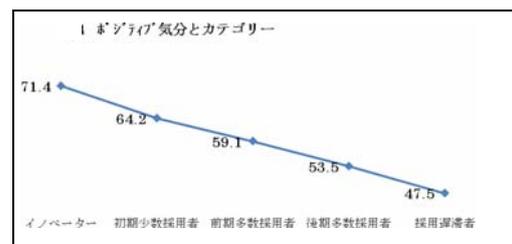
世代への社会貢献」「自己成長因子」「精神的充実因子」「地域・仲間への貢献因子」からなるプロダクティブ・エイジング志向性尺度を開発した。

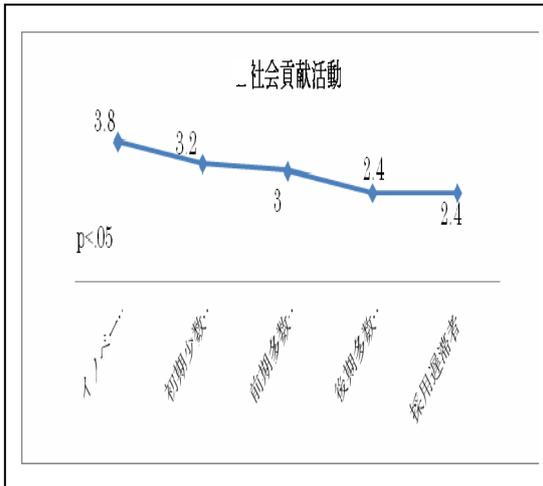


開発された尺度について、イノベーター普及理論を用いて「イノベーター」「初期少数採用者」「前期多数採用者」「後期多数採用者」「採用遅滞者」に類型化するカットオフポイントを算出した。

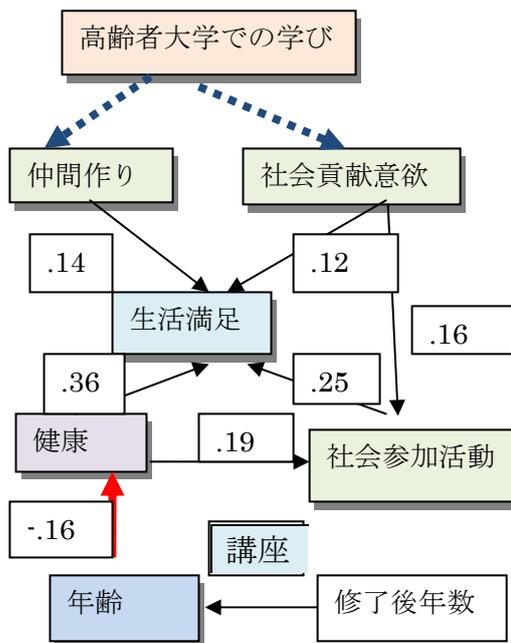


類型化はポジティブ感情とプロダクティブ・エイジング活動を予測し、1年間の高齢者講座は「前期多数採用者」「後期多数採用者」「採用遅滞者」をより高い志向性の類型に変化をさせる影響を持つことが明らかになった。



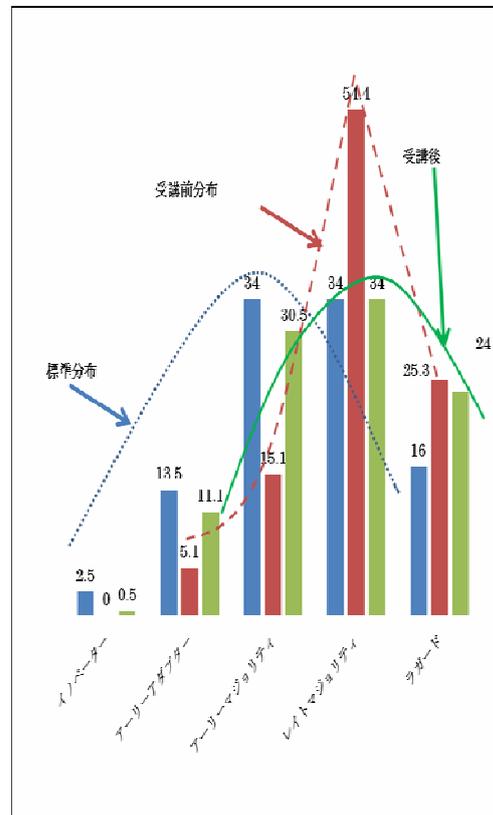


研究2：高齢者による高齢者のための高齢者大学における仲間づくりと社会参加活動について基礎的資料を得る目的で行った。調査協力者は行政主導で行われてきた高齢者大学修了者657名である。結果、高齢者大学は仲間を作ること、社会貢献についての重要性（プロダクティブ・エイジング志向性）を学ぶことに影響を与えた。修了者の生活満足度は、仲間の存在、プロダクティブ・エイジング志向性、健康、社会参加活動と関連していることが明らかになった。



研究3：プロダクティブ・エイジング志向性が高齢者のための1年間の講座参加によって、変容するのか？また、その変容は受講する講座内容に影響を受けるのか？変容は、プロダクティブ・エイジング志向性のどのカテゴリーレベルでも同じように起きるのかについて明らかにすることを目的とする。調査協力者は高齢者のための学習講座参加者371名、年齢平均67.33歳、健康状態良好者75.2%、経済状態普通以上73.5%

方法は、受講前と受講後に質問紙法で実施
結果は（1）講座受講前と後では、プロダク



ティブ・エイジング志向性得点は全体としては向上する。しかし、カテゴリーで見ると、少数であったアーリーアダプターは牽引力とならず、より低いカテゴリーの多数の方向に引き込まれていた。（2）受講講座の内容によっても変容は異なっている。（3）各カテゴリーから次のステップへの変容には違いはなく、キャズムは見られなかった。

		受 講 後					総計 名 %
		イノベーター	アーリーアダプター	アーリーマジョリティ	レイトマジョリティ	ラガード	
受 講 前	イノベーター						0
	アーリーアダプター	0 0	4 21.1	4 21.1	5 26.3	6 31.6	19 100
	アーリーマジョリティ	0 0	14 25.0	24 42.9	9 16.1	9 16.1	56 100
	レイトマジョリティ	1 .5	18 8.9	65 32.2	86 42.6	32 15.8	202 100
	ラガード	1 1.1	5 5.3	20 21.3	26 27.7	42 44.7	94 100

本研究全体の結論として、高齢者大学の仲間づくりは、高齢期というライフステージの中で新たな価値観を共有することが求められていること。その価値観を提供することを可能にするのが高齢者大学という学びの場であり、教育提供機関の掲げる学びの目標は、共有化する価値の規範形成にとって重要な働きをすること、さらに、その規範は講座修了後の活動にも影響を与えることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

藤田綾子 2010 高齢者のプロダクティブ・エイジング志向性尺度の開発と応用に関する調査研究 甲子園大学紀要 N038 163-171

藤田綾子 2011 高齢者の高齢者による学習講座企画・運営に関するモデル構築のためのアクションリサーチ 甲子園大学紀要 N039 121-12

藤田綾子 2012 高齢者のプロダクティブ・エイジングイノベーション行動に関する研究 甲子園大学紀要 N040 65-71

[学会発表] (計2件)

Li-Mei CHEN, Ayako FUJITA, 2011
Productive Aging in China: Toward Evidence-Based practice and Policy
Peking University Beijing, China

藤田綾子 2012 超高齢社会日本におけるエイジズムからプロダクティブエイジングへ
EU インSTITUTE 関西第16回国際シンポジウム

[図書] (計1件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 綾子 (FUJITA AYAKO)
甲子園大学・人文学部・教授
研究者番号: 60030686